

第11回矢作川『川会議』ディスカッション 「矢作川の今昔物語」

司会進行：矢作川水族館長

阿部 夏丸

豊田市矢作川研究所研究顧問

関西学院大学社会学部教授

古川 彰

○司会 これより「矢作川の今昔物語」と題しまして、会場の皆様と一緒にディスカッションを始めたいと思います。司会進行は矢作川水族館館長の阿部夏丸様、先ほど話題提供をいただきました古川様をお願いいたします。

○阿部 こんにちは。今から1時間半ほど、「矢作川の今昔物語」と題してお話をさせていただきます。今日は私のおしゃべりはありません。皆さんのおしゃべりです。お酒飲まないで、そんな話はできないという方もみえると思いますが、酔ったつもりで、昔の思い出話とか、自慢話、そういったものをいろいろ聞かせていただきたいと思います。そして今日は皆さんに年代別で座っていただきました。

司会進行させていただきます阿部夏丸と申します。よろしくお祈りします。それから、僕一人だとぼんつくの話しかしないと心配されてきて、古川先生にもお願いしております。

○古川 私はマイクを持って走る係ですので、どんどん手を挙げてください。

○阿部 ではみなさん、矢作川という川、みんな、昔を懐かしんでください。昔の景色はどうだったのだろう。暮らしはどんなふうだったのだろう。川で洗濯したり、いろいろなことをしていたかな。あと、どんな遊び方をしたのだろう。実はこういう話をすると、ついみんな難しい話をするのだけれども、本当にしようもない話が僕たちは聞きたいです。特に、さっき古川先生がろう人形とおっしゃったのですが、ずるいんですね。僕たちはいい川を知らない。僕は50歳になりますが、もう白濁した時代からしか知らない。その前の話をぜひ、皆さんからお話を聞かせてください。ご協力をお願いします。

後ろに展示してある写真見ましたよね。矢作川の昔の景色があるのですが、今と比べてどうだったのかなということ、うちの前の川はこんなふうだったよというお話を誰か聞かせていただけませんか。私から名前を当ててしまいますよ。無理やり当てても必ずお話をしてください。では、今回写真を提供して下さった前田さん、当時の話を聞かせていただきたいと思います。

○前田 私、ちょうど70歳になりましたが、小学校1年生に上がったころに、近くに防火用水みたいな池がありまして、そこへ先輩が放り込んだんですがね。

○阿部 放り込んだというのは、何を放り込んだんですか。

○前田 私をです。まだそのころは泳げなかったのですよ。だから、泡を食って犬かきで泳いだのです。平戸橋、今ここから見ますと橋がありますね、あの下が一番岩、二番岩、三番岩、四番岩、五番岩と、瀬に従って向こうまで今でも岩があります。小学校4年生ぐらいになると、この辺の子供たちは皆、平気で泳いだ記憶があります。

○阿部 小学校4年生で、今の平戸橋の下ってすごく危ないですよ。

○前田 ええ。よそから来た人が、年に1人ぐらいは亡くなりました。

○阿部 当時もあったのですか。

○前田 ありました。岩が川の中に隠れていますから、そこに当たると怪我をしたり泳げなくなったりしたと思います。

○阿部 ありがとうございます。今、1年に1人ぐらい死んだと、でもびっくりしてしまいますよね。若い世代の方、今のお話を聞いて何か質問とかありますか。永島さん、どうですか。

○永島 急に振られました。私は井上町で育ちました。私の時代は、親が、「矢作川には行ったらあかん」と。「矢作川に近づくことも許さん」と家訓ぐらいな勢いで言われたわけ。やはり、小さい子だけで行くと必ず流されるので、危ないから行くなと。でも、それは平戸橋あたりの話であって、支流の籠川とか水無瀬川などは全然オッケーで、でも、水無瀬川といたら、今でも

そうですが、汚い川で、遊びに行くと足がズブッとここまで入って、足を抜いたらもう靴がないわけです。泣きながら、はだしてベタベタ帰るという感じでした。

○阿部 ありがとうございます。今、学校から矢作川へは行っ
てはいけないという言葉聞いたのですが、せっかくここは年
代順に並んでいるので少し聞いてみたいと思います。

子供のころ、学校で矢作川では遊んではいけないと言われた
世代の方、手を挙げてください。(挙手あり)

矢作川に限らず、近くの大きな川で遊んではいけないと言わ
れた方、手を挙げてください。(挙手あり)

意外と少ないですね。ちょっと不思議ですよ。僕は50代、こ
こからびたっと分かれると思っていたのですが、言われなかつ
たですか。はい、年齢を教えてください。

○会場 21歳です。

○阿部 21歳で、川へ行っではいけないと言われなかったですか。

○会場 僕が住んでいるところは名古屋市で、川にも入れない
ところなのです。

○阿部 なるほど。川に入るような人はいない場所だったので
すね。わかりました。ありがとうございます。

恐らくプールができたというのが、そのはざまだったのでは
ないかという気がするんですよ。では皆さん、手を挙げる練習
をしましょう。小学校のとき、学校にプールが無かった方、手
を挙げてください。(挙手あり)

見事に分られました。気持ちいいな。ここで分かれると言っ
たら、本当に分かれたね。無かったんですよ。無かった
世代の方はどこで泳いでいたのですか。だれか教えてください。
お願いします。お名前をお願いします。

○成瀬 成瀬と申します。私たちの水泳の場所は矢作川です。今思
うと、グリーンロードの橋の所に両枝橋があるのですが、その下
で石野村の小学校対抗の水泳大会をやったことがあったのです。

○阿部 枝下の辺ですよ。

○成瀬 そう、枝下の辺り。学校対抗の水泳大会もあったんだけ
れども、私らが水泳を覚えたのは、小学校の高学年ぐらいのとき
かね。今、広瀬やなのところに信号がありますわね。交差点なの
でスピードが落ちるわね。そこをぱっと走って行って、トラック
の後ろへぶら下がり、藤沢のダムのところまで乗って行って、
あそこからまたずっと川を流れてきたんですがね。

○阿部 ちょっと質問していいですか。それは車にただで乗っ
て、上流から流れてきたと。そういう遊びですか。

○成瀬 ええ、そう。

○阿部 いや、僕、ちょっと今、感動しています。矢作でもそ
ういう遊びがあったんですね。

○成瀬 いや、そんなこと学校にばれると、それこそどじから
れてしまうので、それは内緒でやっていたのだけれどもね。そ
こで泳ぎなどを覚えたんだけれどもね。

○阿部 そうやって川を流れた。

○成瀬 川を泳いで上るということはとてもじゃないけれども、
1日かかって泳いでいけないので。それで、あそこまでトラッ
クの後ろへぶら下がり、それでダムのところでびよんと飛びお
りて、あのダムの下から、ずっと今度は川を流れてくる。そうす
ると途中で、アユのガリをやるガリ場に行くと、針が足に引っか
かったり何かして、怪我というのか、そういう思い出があります。

○阿部 ありがとうございます。僕、以前四国にいたころに、四
国の子供たちは川漁師さんの舟に乗って上流まで上って流れて遊
んでいるという、そういう景色を見たのですが、矢作にもあった
のは驚きです。ほかにこういう遊びをした方はいますか。

○吉橋 私は大正10年生まれなので、今、90歳になります。

○阿部 拍手。(拍手)

○吉橋 生まれは平戸橋町。この堤防の向こう側です。それで、今、
そこに見える、あの平戸橋のこちらの大きな岩、あの岩のこちら
に大きなよどみがあって、そこで6年生以上が水泳大会をやるん
です。それは舟を真ん中に浮かべて、一列に並んで、みんなで泳
いで、「よいしょ、よいしょ」とずっと回るんです。

○阿部 舟について泳ぐんですか。

○吉橋 舟のぐる周りを。それでおぼれるといけないから、先
生が舟の上に乗って監視しているわけです。そうやって水泳大
会というのが毎年行われて、100m以上泳いだ人には賞状がも
らえるのです。そんな時代でしたから、今、子供は矢作川へ来
るとおぼれるなんておかしい、不思議。私たちはそんなことは
思いません。なぜおぼれるのかと思う。私たちは、学校から帰っ
てくると、まずかばんを放っておいて、あそこの岩から飛び込
んで、この辺を泳いでいくのですが、この辺はもっと大きな岩
が出ていたんです。その岩に波が立っているんですが、その波
に乗って、その岩の上を、腹をつるっと滑らせて流れていくの
が非常におもしろかったと。それがこの辺と、「百善(どうぜん)」
とって、あそこに貯木場があるんですが、貯木場の隣のとこ

ろにやはり岩が出ていて、そこも大きな波が立っているんです。それで、そこも腹を滑らせて、つるっと流れていくのが非常におもしろくて、そうやって遊んだものです。

○阿部 ありがとうございます。今、岩の腹を滑らせて流れていくというのは、やった方でないと絶対にわからない感触だと思います。同じことを体験してみえた方、みえますか。

○杉浦 杉浦といいます。ちょうど対岸の平戸橋のすぐ下にお宮さんがいるんですが、その前に住んでまして、あと2カ月で69歳になります。今の平戸橋のすぐ下に瀬があります。当時、あの上から下へうまく岩を避けていくようにやって、小さいときは体が軽いものですからよかったです。だんだん体が大きくなって、あるとき、ちょっと水位の少ないときに、行けるだろうと思ってやったら腹をザアッとすりまして、腹が真っ赤になって、ひりひり、ひりひりした記憶があります。中学校の2、3年生のころだと思います。

○阿部 何年生ぐらいまで川で泳いだんですか。

○杉浦 川で泳いだのは…、高校へ行ったときにはアユを釣っていましたので。

○阿部 アユ釣りを始めるまでは泳いでいたと。

○杉浦 アユ釣りは4年生からやりまして、さっきの話ではないですが、ガリを切った人を見て、「あっ、おじちゃん、あそこで切ったな」と。それを見て、おじちゃんが帰ると、潜って行って、それを回収してつないで、竹竿を持ってきて、組合員ではないんですが、釣っていました。

それから、今あそこにお宮さんがありまして、胸形神社と名前がありますが、通称「弁天さん」と言っていた。小学校3年生のときですが、学校の先生が、地元の伝説を調べてこいということと言われて、近所のおばあさんのところへ聞きにいったら、「何であそこを弁天さんと言うか知っているか」という話で、聞きましたら、「昔、夏に弁天さんが川で泳いでいた。水から上がって、着物の帯をたらしと垂らして、あの岩を歩いて行って、あそこで休んだ。その帯の跡が残っている」と言われました。今でもずっと白い帯の跡が残っています。「それで休んだところにお宮さんを建てたんだよ」という伝説を聞かせてもらった記憶があります。

○阿部 ありがとうございます。おもしろい話です。今、たまたま古単のこのあたりを子供のころ泳いでいた話を聞いたんですが、当時はやはりみんな泳いでいたんですかね。では、ここ以外のもっと上流であるとか、下流であるとか、そういうところのお話をだれか聞かせていただけませんか。

○新實 ご無礼します。新實と申します。私、上流のほうの百

月ダムがあるところですが、小学校、中学校時分は、遊ぶところといえば川しかなかったわけです。夏は水が出ると川へ行って遊ぶ。親が夏は昼寝をしないといけいなので、「うるさいから川へ行け、川へ行け」と。とにかく川しか遊ぶところがなかったわけです。普段の水が出ていないときは、水が少ないですから軽いですが、雨が降って大水が出ると喜んで川へ行ったものです。先ほどの話があったように、上のほうから大水に乗って流れていくというのが…。

○阿部 ちょっと待ってください。多分こっちの若い方は、「水が多いから川へ行く」ということがわからないと思うんですが、水が多いときのほうが楽しいんですか。

○新實 そうそう。普通の日のそんなちゃらちゃら水のところでは何もおもしろくないものだから、水が出たときほどおもしろいので川に行ったものです。冬でも、私たちの子供時分は川に砂浜があったんです。ダムができて、発電所ができたから砂がほとんど流れてしまって、今は上流のほうへ行くとか砂浜がありません。石ばかりです。子供時分は冬でも河原へ行って遊ぶ。夏はとにかく川。ほかに遊ぶところがないものですから、砂浜へ行けば相撲をとったり竹とり。子供がたくさんいましたから、仲間で竹倒し大会だなんていうことをやって遊んだものです。

○阿部 ありがとうございます。今ずっと、この川遊びの話がいっぱい出てきました。やはり川遊びの話をする、皆さん、いい顔をされますね。ですが今、砂の話が出てきたので、砂がどこにたくさんあったとか景色の話を。実は僕たち知らないんですよ。僕は下流に住んでいて、もう砂浜だらけのところでは生活していたんです。上は石ばかりの川だと思っていたんですが、昔は砂があったんですか。だれか、その辺のお話を聞かせていただけませんか。

○新見 新見といいます。ここから3kmぐらい下流に梅坪という部落があるんですが、僕はそこ出身です。先ほど山本君が、川ガキだったころに、それがばれて校長先生にしかられて、もうやめてしまったということと言ったけれども、僕は74歳になったところですが、僕らのころは学校へ行かない子がいっぱいいた時代です。終戦が小学校2年生ですから、学校へ行かなかった。僕らみたいな川ガキがいたりして、僕も小学校の5年の終わりか6年になるころまではほとんど学校へ行かなかった。ずっと夏は川にいた。寒くなると砂浜の上に出て寝るとか、支流の水は暖かいから支流へ行くというようにしていたのですが、余り学校へ行った記憶がない。通学団の一番後ろをついて行って、ついでに川のほうへ行ってしまふ。冬は、これも通学団の一番後ろをついていくのですが、山へ入って小鳥をつかむ。学校へ行くと、「やあ、よう来た、よう来た。勉強はここまで進んでいるから、教えてやるからちょっと待っておれ」と。そういうふうだった。

川の水量の話もさっき、昔の水量はこんなものだったということを80歳ぐらいの人が言われたという話を山本君が紹介して

くれたが、僕もそんな記憶です。

○阿部 あそこに川舟があるあたりまで水があったんですか。

○新見 いやいや、今日のこの水量ね。

○阿部 この水量が普通ですか。

○新見 とにかく川を渡っていくのが怖くて、歩いては渡れなくて、泳いで渡ったんだけど、斜めに進んで、はるか下のほうに着いてしまうような川だったな。

○阿部 新見さん、昔、白い砂があった場所の話聞かせていただけますか。

○新見 籠川という川が、本川に合流するところが僕の遊び場ですが、その両側はやはり砂だった。

○阿部 あの場所が昔は砂だったんですか。この辺はどうだったんですかね。

○新見 こちら辺は、私より年上の人がおいでるから聞いてください。

○村山 村山と申します。当年84歳でございます。砂の話だということですが、まず、川が変わったということでございます。この広場から向こうが本流になっているんですが、我々が小学校の5年か6年生ぐらいまでは、川の本流は、今、皆さんが座っておられる、ここが本流だったんですよ。

○阿部 この辺りが、それは水が多いだけではなくて、

○村山 ここが本流であって、川が向こうへ動いているということですが、川の形も変わっているのですが、向こうに懇親会で太鼓をたたかれる広場がございますね。あそこら辺は本当に砂場が多かったんですよ。あそこは砂場があって、ここですると回って、あそこに旗がありますが、あそこに水量計があったわけです。だから、こちら辺は本流が流れていたわけです。それで、少し下へ行くと、橋の跡がございますね。昔の、明治15年ぐらいにできた平戸橋ですね。あの下にはものすごく河原があったんですよ。弁天さんから細い川がずっとあって、ここに中州があったわけです。中州の向こうを流れていた川が、ちょうどこの平戸橋の向こうからこちら側へおりにいたわけです。この下にはものすごい砂場があったわけです。我々は、学校から帰ってくれば、うちへ帰らずに、まずここへ来て、藪の中へかばんを隠しておいて、夕方まで、唇が青くなるぐらいまで遊んでいましたね。もう寒くしてしょうがないときには、岩の上に乗って、カメが甲羅を干すようにして、それでうちへ帰っていっ

たものです。だから、我々の時代は、山で鉄砲ごっこをやるか、川へ来て泳ぐか、戦争ごっこ、そんな遊びしかなかったわけです。

○阿部 ありがとうございます。すごいです。80年前の記憶が、あそこに砂があって、ここに淵があって全部覚えてみえるというのは、ちょっと感動します。それは多分、川でしょっちゅう遊んでみえたかたらだと思えます。

今、戦いのような遊びをしたと、何ごっこと言いましたっけ。

○村山 先ほどの吉橋さん、我々の大変な先輩ですが、我々と川の向こうの人間とで、川へ遊びに来て喧嘩をするのが仕事になっていたんですよ。その時分の話で、もう歌までできているんですよ。「越戸のやっこ、こうやっこ、尻にだんご挟んで、尻から飛ぶとて落とした」なんて、そんなことをやって、越戸と扶桑町で。

○阿部 その歌、また後でゆっくり聞かせてください。

実は、川向こうと川のこっちで石を投げ合って戦いをするというのは、これは日本全国、どこの川にでもあることです。子供のころ、川の向こうとこっちで石を投げ合ったりして戦い、戦争をしたことがある方、手を挙げてください。(挙手あり)

こっちのほうは余りみえないですね。ありがとうございます。

きっと日課だったんですよ。とりあえずあいさつがわりに、どうですか、そんな話を聞いて、何かご意見、ご感想、ご質問とありますでしょうか。若い方、元気がなくなってしまうと申しわけないので、実は僕もそんなことをしていたよとか、したいよという方、みえますか。やり方を聞いてみますか。

○清水 戦いが好きなので、すごくしたいなと思いました。

○阿部 今の子供たちとか、遊ばないとよく言われるんだけど、やり方がわからないんでしょうかね、どうなんでしょうか。何で今の子供たちは……。

○清水 私はもう30代のもう後半なので、ですから、多分もっと若い人たちはちょっと違う感想があるかもしれないのですが、私は山のほうで、川がほとんどない知多半島で育っているので、山のもので遊ぶといっても、多分皆様方のほうが詳しいと思うんですけど、でも投げ合うとしたらボールを投げ合って遊んでいましたね。投げ合うものはボールです。

○阿部 ボールですね、キャッチボールですね。石は投げないですね。

○清水 石は投げないです。海に投げるぐらいです。

○阿部 ありがとうございます。遊んだ話をもう少し聞かせていただけますか。だれか、このころ、こんなことをやったよという話。

○会場 それこそ泳ぎの話になるのですが、今、広瀬のヤナのところに新しい橋ができて、あれは少し高くなったと思うのですが、昔はあの欄干が木でできていたんですね。あの上の幅が、どうですかね、上が平らで、30cmないくらいの木だったんですね。あそこを片足でけんけんやりながらずっと渡っていったんですね。それが、ある人が失敗して川へ落ちたんです。それがきっかけで、あの欄干から川へ飛び込むという……。

○阿部 そういう遊びができたんですか。「危ないからやめましょう」とかの看板は立たなかったんですか。

○会場 えっ、そんなの何もなかった。

○阿部 そういうおせっかいはなかったんですね。いい時代ですね。

○会場 そういう危険なこともやったし、川の向こう側、東側で、ヤナをかける瀬尻のところ、あそこら辺は水深が大分あったんですが、その岩の上から飛び込んで、潜って、底まで行く遊びをしていたのだけれども、ある人が頭からまともに飛び込んで、潜り過ぎてしまって底に頭をぶつけてけがをしたことがあったんですけれどもね。誤って落ちたのがきっかけで飛び込む遊びができませんでした。そういう危険な遊びをしたこともあるんです。

○阿部 ありがとうございます。さっきからお話を伺っていると、川で泳いだ、もう首までつかって泳ぐのが当たり前の世界という矢作川が見えてくるんですが、僕は川へ行くとなると、泳ぐのも好きだけれども、それ以上に魚をとるのが好き、ほんつくですよ、ほんつくが好きでずっとここまで来て、大人になってしまったんだけど、魚とりというのはどうだったのでしょうか。皆さん、子供のころは泳ぐばかりでしたか。どんなものを、どんなやり方で、お願いします。

○外狩 魚釣り、魚つかみなんていうのは、戦後のどさくさからちょっと落ちて着いてきたころはウナギです。ウナギなどはうげを入れておくと、朝、うげの中にぎっちり入っている。細いウナギがこれぐらい入っていた。

○阿部 うげにはえさは何を入れるんですか。

○外狩 ミミズです。それからツボを開いて入れておいて、明くる日、雨が降って水が出たときなどに、うげの中が泡が吹いているぐらいウナギが入っていた。

○阿部 うらやましい話ですね。

○外狩 本当に。今考えてみると、あのメソがどうやって来て

いたのかよくわからないが、考えてみたら大変なウナギ。いつも遊んでいても見えるのだから。平戸橋のダムの堰堤の、今、ゲートがあるでしょう。ゲートから水が吹いているでしょう。その吹いているところへメソが黒くなって張りついている。それで、袋を持って行って、下で受けていて、上で竹でたたくと真っ黒になって下がってくる。それでうちに持ってくると、鳥のえさ。

○阿部 ウナギが鳥のえさですか。

○外狩 メソが一升ぐらいならすぐつかまえられる。そのぐらい魚がいました。

○阿部 ありがとうございます。信じられないような話ですね。ウナギがだんごになって堰の下に真っ黒になっているというのは、僕も話ではよく聞くんですよ。でも今はなかなか見られないので、ちょっとうらやましい。

今、ウナギをとった話を聞いたんですが、ほかにも何か、何をとったというお話を聞かせていただけませんか。

○前田 今いるかどうかわかりませんが、ナマズがたくさんいたんですよ。先ほど杉浦さんが弁天さんの話をされたけれども、ナマズは弁天さんのお使いであって、食べてはいけないということが言われておりました。あその弁天さんご拝殿がもう一つこちらに、下のほうにあったんです。そこにはナマズの絵をかけた絵馬が掲げてあったんですね。ナマズだとか、ウナギもこのぐらいのやつを3本ぐらいつかんだ覚えがあるんですけども。

○阿部 このぐらいというのは、手首ぐらいの太さですか、へえ。

○前田 そういうウナギは普通にかば焼きにしても、油が多過ぎて食べられない。結局、蒸して、それから焼くということですね。それから、もう一つ、珍しい魚ですが、私、ちょうどこの辺で、幾つぐらいのときか覚えがないですけども、カワマスというのか、我々はサクラバエと言ったんですけどもね。

○阿部 色のきれいなやつですね。

○前田 そうです。

○阿部 きっとヒガイでしょうね。

○前田 今は全然ないですが、当時でもなかなか釣れなかった。そういう思い出があります。

○阿部 ありがとうございます。いかがですか。今、ウナギとかナマズを釣るとい話があったんですが、今でもウナギやナマズを毎日のように釣ってみえる方はみえますか。あつ、みえる。今のウナギとナマズ情報を聞かせていただきましょうか。

○水野 広瀬町に住んでいる水野と申します。ヤナの付近で、長網というんですけれども、10m から15m ぐらいの紐に50cm ぐらいの糸と針をつけて、そこにえさとしてアユをつけて……。

○阿部 長網って、一般的にははえ縄というものですな。

○水野 そうですね。でも、天然のアユでないと食べないんですよ、ウナギでもお利口なんです。

○阿部 ぜいたくですね。

○水野 ぜいたくです。それと、あとはうげを入れて、つかまえます。去年は15匹ぐらいつかまえたですね。

○阿部 大きさはどのくらいですか。

○水野 大きさはまちまちですが、大きいものはこのぐらいですね。

○阿部 すばらしい。

○水野 あと小さいものはこのぐらい。やはりおいしいですよ、全然味が違います。

○阿部 まだまだ矢作川にはウナギがたくさんいると。

○水野 います。

○阿部 ありがとうございます。今のお話を聞いて、もうすぐにもウナギ釣りに行きたくなってしまった方がみえるのではないかと思うんですけれども。

○松武 確実にウナギがとれる話をしたいと思うんですが。

○阿部 この辺からだんだん釣りばかの話になっていきますので、よろしくお願ひします。

○松武 いやいや、釣るんじゃなくて捕るほうです。私はこちらではなくて、長崎県の諫早ですが、小学校のときにとっていた漁業法です。大体30cmから50cmぐらいの川の深さですが、ウナギが泳ぐところは大体わかるんですね。底にすり鉢みたいな大きな穴を掘る。石をとって穴を掘って、そこに山からとってきたサカキを敷くんですよ。あれはぶーんと少しにおいますよね。サカキの木、あれをずっと下に敷いて、その上に石で塚をつくって、それから、3日ぐらい置いた後に底の周りを締め切って、底の塚の石をとって、水を排出するとウナギが4、5匹必ずいるんです。

○阿部 石ぐる漁というものですな。諫早のほうは潮の満干は

ないところですか。

○松武 いえいえ、そこは感潮河川なんです。引き潮のときにしかとれないんです。ただ問題は、大雨があって、石塚の中の砂がたまるともうだめなんですね。ですから、そういうときはあきらめなければいけないけれども、雨が降らなくて、通常の場合には必ず4、5匹は捕れるということで、それをタンパク源にして生活していたんですが、そういう漁法がこちらにあるかどうかわかりませんが、それが向こうでのポピュラーな方法でした。

○阿部 ありがとうございます。今のは、石ぐる漁といって、海の河口などで干潮のときに穴を掘って石をセットしておいて、2、3日たつと石の中にウナギが入るんですね。次の干潮のときに行って、石を取り除いてウナギをとるという漁法です。一度矢作川でも挑戦してみたいと思います。

それともう一つ、今、砂で埋まったらウナギがとれないと、川底の石は、やはり砂で全部埋まってしまうと問題があるんじゃないかね。

今、ウナギの話とナマズをとった話が出てきましたが、ちょっと手を挙げる練習しましょう、アユ釣りをされる方、手を挙げてください。ありがとうございます。もっといっぱいかと思っただけでも、当時のアユ釣りというのはどんなアユ釣りだったですかね。今と一緒にしたか。

○村山 僕がアユ釣りを始めたのが65年ぐらい前になるんですが、やはり大きさをいくと、大きさが今のアユの約倍はあったんですね。

○阿部 ちょっと待ってください。倍ですか

○村山 はい。目方も長さでいっても、平戸橋の下へ行けば、25cm ぐらいのアユが釣れましたね。今と昔では、やはり釣り人の数が違うわけです。だから、我々が知っている範囲でも、夏場にアユ釣りで生計を立てていた人が、大体この近所で4人ぐらいいたんですよ。釣れが悪くなったなというのはここ10年ぐらいではないですかね。その前は、もうとにかくよく釣れました。

○阿部 アユ釣りで生計ができるくらいアユも釣れて、アユも売れたんですか。

○村山 そういうことですね。本職でやっている方は、私知っている方が4人ぐらいみえますが、僕も20歳ぐらいのときに舟を持っておりまして、舟で行ってたくさん釣れるときには100匹ぐらい釣れたんですよ。舟の中に、ちょうど40cm、50cm ぐらいの四角な升があるわけですが、100匹釣れると、その升の中がいっぱいになり、酸欠でアユが死んでしまいました。そのぐらい釣れたんですよ。結局、ダムができて、アユが釣れなくなったということは、これは確かな話だと思いますね。アユ釣りさんの

数も少なかったんですよ。アユ釣りに行くと、そんな殺生なことをするなんて笑われたものです。

○阿部 ぶっちゃけた話、昔は魚とりをする人というのは差別されたところがありますか。

○村山 我々の同級生ぐらいたと、おじいさんがアユ釣りなどという殺生なことはするかと怒って、竹を持って追い回していたことは覚えておりますね。

○阿部 ここにリオの記事で、新見さんが書かれた外狩さんの記事があって、当時、アユを10匹も釣れば1日500円の副業収入があったと書いてあるんですよ。

○外狩 昭和30年ごろ、だんだん景気が出てくるころだったけれども、その時分に、1日アユを釣っていると、上手な人は30匹ぐらい釣れる。それで、ここらでトラックの運転手をやっている人は400円ぐらい、私も竹屋にいたけれども、ちょっと変わった仕事だったから1日500から600円くれた。当時、1日仕事をしておいて、夕方にアユ釣りに行くんです。10匹ぐらい釣れます。それで、小さいもので大体30円、まあまあアユは50円、大きなアユは70円ぐらい。それを自転車に乗って、夕方とりにみえる。昭和28年ごろからですね。そういうことが7、8年あったね。

○阿部 7、8年ですか。

○外狩 アユを釣る人は、結構いい金をとったものです。トラックの運転手でも400円から、稼ぎのいい人で500円ぐらい。さらけ出して言うけれども、当時、トヨタ自動車へ私が30年に入ったのですが、そのときに308円だったんです。アユが1匹30円、いいものは70円だった。ですから、会社などに行っていられない。アユを釣っていたほうがよほどいい。

○阿部 すごい話ですね。ちょっと若手の釣り師の方に話を聞いてみたい。誰か、それに対して質問とか何かありますか。椿さん。今、若手の釣り師として、その当時の話を聞いて、いかがですか。

○椿 椿といいます。率直に、今、その時代にいたら、多分僕は会社をやめていると思います。

○阿部 恐らく、この中にもそういう方が何人かいらっしゃるのではないですかね。当時はやはり釣り人が少なかったからよかったですか。

○新見 養殖がなかったからアユが高かった。

○阿部 アユの値段がよかった。その辺の話で、誰か何か伺い

たいこととかありますか。

○椿 矢作のアユは非常に高価なものだったということを知ったことがあるんですが、先ほど自転車という話があったんですが、名古屋の市場に持っていくときに、どのようにして持っていったのですかね。今ですと、氷があったり、クーラーがあったりするのですが。

○外狩 もちろん夕方になると氷をおけに乗せて、くぎで氷を割って、中へアユを並べて、それから押さえて、明るる朝、3時ごろ起きて行かれましたが、氷は十分あるんです。それはしっかりしていかない名古屋では買ってくれない。それで、平戸橋のアユが来たとなると、すぐ売れてしまう。そのぐらいよかったです。当時、1日働いて400円時分には、値のいいものは50円もするし、小さいもので30円。あんなおもしろいことはなかったな。

○阿部 でしょうね。この矢作川、僕の全然知らないところが見えてきて、うれしいですね。夢のような、悔しいような。

だれかちょっと矢作川のことで、またほかに思い出話とか何かありますか。景色とか環境の話。

○吉橋 30年ごろは大水が出ると扶桑町がいつも水浸しになる。ここ何年の間に堤防を増築し、立派な水門もつきましたですね。あれならもう大丈夫です。昭和24年ごろ、私が区長をやっているときに、扶桑町から平戸橋のあの大きな岩を割らせよという申し出がありました。私はわからないので、前々区長をやったような方に集まっていたら、それに対していろいろと審議いたしました。討議したところ、「あの岩があるから越戸町がもっているんだ」と。越戸の部落が大水のときにもっているんだと。ダムをあげると、その水があつた岩に当たって、この扶桑町のこちらに流れるわけです。だから扶桑町が水没するわけです。それで、あれを割らせよという話があったんですが、「あの岩は死んでも守れ」と。こういう年寄りの声だったのです。その岩がいまだに健在でいる。あれだけ割らせなくてよかったなど。そういうことを今思います。

○阿部 ありがとうございます。ふるさとの石を守るという、とってもいい話ですよ。災害のこともあるけれど遊んだときの景色がそのままふるさとだから、やはり壊したくなかったんですよ。きっと、そんな気持ちがあります。

ではこちらから、お聞きしたいことがあります。暮らしの部分の話で、今はちょっと川から距離が離れてきてしまったみたいな話をよく聞くんですが、普段の生活の中で、釣り以外のことで川べりまでおいて洗濯をしていたとか、何かをしていたとか、そういうことはあったんですかね。その辺の話を聞かせていただけませんか。

○村山 ちょうどこの前の旧平戸橋の橋脚のすぐ下に洗濯岩という岩があったんですね。そこへ我々が子供時分に川へ来ると、

部落の人が来て、そこで洗濯をしているわけですね。その石が、どうですかね、幅が40cmぐらいで、長さが約2mぐらいですか、そんな石があって、そこでみんな洗濯しているわけですね。そのすぐ下に富士山のような岩があって、我々はそれを富士山岩と言っていたものです。その岩に乗って、そこから本流へ飛び込んでいったんです。この扶桑町は昔から養蚕が盛んなところでしたので、お蚕さんを飼うざるだとか、いろいろなものを川へ持ってきて、皆、洗っていたわけです。だから、昔の人は皆、川をとて利用していたわけです。

今もほじくれば出ると思うのですが、我々の子供の時は、ここから約50m上に水車があったわけです。水車を回すために、片一方は石垣を積んで、片一方は、その半分ぐらいの石垣を積んで、我々の子供の時には、そこがまだ残っていたわけです。あそこを掘れば恐らく今でも出てくると思うんですが、今は山の中へ入っています。だから、それぐらい変わったということですね。川はお互いにとて利用していたわけです。

○阿部 ありがとうございます。今、洗濯岩と水車小屋の話が出てきました。川で洗濯していた景色を見たことがあるという方はどのくらいみえますか。(挙手あり)

矢作川そのものではなくて、支流の家の近くの川ですとか、そういうことは昔、多かったのでしょうか。

実は僕も、51歳になるので、小学校のころぎりぎり。家の近くの矢作川のすぐ横の川でみんな洗濯をして、おひつがカリカリになると川につけておく。おひつをつけて、石を置いて沈めておくんです。そうするとオイカワとか魚が来て、おひつのお米を全部きれいに食べてくれるから、洗わなくていいということで、みんな木のおひつがつけてあった。ところが、その横にネズミ取りがざばんとつけてあって、「何だ、この針金」と言っても上げるとネズミが入っているという、そういうすごい時代でしたね。

さあ、そろそろ僕のほうもちょっと顔に焦りの色が出ていでしょう。お話がだんだん少なくなってきたので、ここでまたちょっと違う話を、こんな景色があったよというのはいないですかね。

今、洗濯をしに来ている方がみえたというんですけれども、ほかに川へ来て何かしていたということはないですか。

○加藤 私は小原村の出身で加藤といいます。何年前に、矢作川の筏下り大会に参加しまして、ちょうど今日もらったパンフレットに懐かしい写真が載っていて、多分このころの写真かなと思いました。出発地点は、ちょうどその中洲の向こうから出発して下っていったわけです。多分、高橋の下だと思いますが、川の真ん中にH鋼が出ていまして、何の意味のH鋼かわからないのですが、そのH鋼に筏がぶつかりまして転覆した覚えがあります。漁協の木戸さんがちょうどいるので、あのH鋼は何だったのかお聞きしたいと思います。

○木戸 今まで戦前の人の話ばかりだったものですから、我々は現在の日本国憲法の時代ですが、戦前の大日本帝国憲法の時

代の話ばかりでした。多分、あれは水位計だと思います。

○加藤 我々は4トン車でないと運べないぐらいのとてつもない大きな筏を持って入れましたので、6人か8人は乗っていたね。中には大事なカメラを持っている人がいたので、その人は片手で泳ぎました。泳ぎは立派な人ばかりでした。矢作川にはそんな思いがあります。

○阿部 ありがとうございます。筏下りの話でした。さっき、昔、泳いだ、遊んだと、おじいさんと言われる世代の方がみんな言ってみえましたが、最近の川を見ていて、皆さん、どのように感じるのかなと思うんですが。

○新見 昔と今と全然違うのは、水量が減ってしまって、どうにもなくなっている。さっきも言ったけれども、昔は、とにかく向こうへ渡れないぐらいの水量があった、今はくるぶしぐらいで、渡っていけてしまうんだけれども、そういう川で過ごした経験のある人が大体は僕らの世代で、僕らが一番若いほうだけれども、大体死んでしまった。川で遊んだり、大人になっても川でアユ釣りをやっている人は大体酒を飲むんです。多分、酒の飲み過ぎで早死にしたことはあると思う。そういう川での生活の経験のない若い人が育っているの、川をどうやってよくしたらいいかというのは、実際、そういう相談する相手もない。とにかく川の底が今とは全然違って、砂がいっぱい流れていたし、石がいっぱいあった。ここから下流は僕らのアユ釣りの場所だけれども、川が平らになってしまって、優しくなってしまった。アユが下から上ってきても、この辺はあまりアユが居ついてくれなくて、通過地点になってしまった。どうしたらいいかということ土木をやっている人といろいろ相談したいのだけれども、土木をやっている人たちも、そういう昔の川は知らないから、どうやって復活するのかということをよくわかっていない。川の水量が減った割に川が広がってしまっているから、優しい、つまりらん川になってしまって、土木の皆さんと一回、川にどうやって昔のような流れを、この少ない水の中でつくったらいいのか、相談したいと思っております。

○阿部 ありがとうございます。みんなが遊べる場所ですよ。

○新見 魚がすめる。

○阿部 魚がすめる。そうですね。魚がすめば人が集まるということですね。ありがとうございます。

○大内 ご無礼いたします。旧小原村から来ています大内といいます。私たちのところには、渡し舟というのがありまして、川の幅にしたらずか50mもあるなしぐらいのところだったので、子供のころは、渡し舟の動いていないときに川遊びに行って、自分たちで動かしてみたりした覚えがあります。先ほどお話し

ていた石投げというも、対岸の笹戸小学校というところがありまして、お互いに石を投げても十分届かない距離ということがわかっていて、安心して投げ合っていたわけですが、それでも、その渡船場の下に砂浜が広くできまして、そこでテニスボールと竹のバットで野球をやっているときはすごく仲よくやりました。そんな思い出があります。

○阿部 ありがとうございます。

○横山 私、平戸橋支部の横山と申します。今まで川遊びの件について、いろいろ皆さん、お話がありましたが、ここで、この矢作川に対しての風景とか環境をちょっとお話ししておきたいと思います。

三河地方は養蚕が盛んであったということです。この矢作川の、今、かなり公園とか、サッカー場とか、いろいろ運動施設もありますが、これらはすべて養蚕のクワ畑だったんですよ。堤防からすぐクワ畑、その間にいろいろな農作物が植えられていたわけですね。私たちは、ここにも同級生がおりますが、ホームグラウンドは久澄橋でした。川の相としては、ここら辺と状況は違います。非常になだらかな川が流れていたんです。後ろのパネル展示で、石がたくさん積まれた舟の写真がございます。あれは砂利舟といって、川の砂を鋤簾でもって乗せて、下流なり上流から土場という船着場へ持ってきて、そこへダンプカーが乗り入れして建築用資材として地方へ持っていったわけです。そのようなことをして、この川の形態というのが、ある程度保たれてきたということだと思います。それが昨今、建築資材も豊富になって、そういうものを使わなくなったということで、今、川の水位というものもいろいろ問題が出ているのではないかと思います。

我々の子供時代というのは、久澄橋の下は、今言いましたように、クワ畑の間に農作物がある、そこにスイカとか、トマトとか、キナウリとかが豊富に実っていました。それをちょっと拝借して、川へどぼんと行って、その砂利舟の後ろから押すのを手伝うわけです。そうするとまた上流へ連れて行っていただいて、またおろしてもらって泳いで帰ってくると、腹も満たされて、下流部ではそのような楽しい遊びができました。そのような時代もありましたが、とにかく今は、この川の流域というのは非常に変わりました、生活にいい環境ではございますが、当時は非常にクワ畑が多かった、全部クワ畑だったということをお話して終わります。

○阿部 ありがとうございます。矢作川はずっと上流から下流まであるんですが、水源より下流の方というのはどなたか、みえますか。

○竹川 水源から下流の話ですが、先ほどの砂の話から始めたいと思うのです。まず、新しい頭首工ができたのが昭和34年ころですね。それ以前は、水源の下、今のフォレストタヒルズの入り口の前の川の中に大きな岩が出ています。あれは全然見え

ません。全部砂っ原でした。川砂をとらせるようになってから、川砂をとって、あと、上から砂が来ないということで、どんどん、どんどん河床が下がった。その結果、天神橋も橋台が菌槽膿漏になってしまって架け替えました。国道1号線の矢作橋もそうです。東名高速道路も小判型に補強していますよね。そういうことで、今考えてみると、河床が7、8メートル下がったのではないかと思うのです。

それともう一つ、頭首工の旧堰堤の話をさせていただきます。あれは木の扉で水をとめていたんです。あの仕掛けは、下が4、上が6という比率ぐらいのところに心棒が入っていて、常には扉が倒れて、その上と下を水を流れていたんです。その上の水の量が減ってきますと、ふんどし一丁の当番の人が、この扉を起こす。ちょっと起こしますと下へ水が勢いよく当たりますので扉がぼんと起きます。そういうようにしてとめてあったんです。明治用水はたくさん水が欲しいものですから、この扉が転ばないようにしていました。下が4、上から6ですから、だんだん水がたまってくると、水の勢いで、また扉がぼんと転んでしまいます。たくさん扉があったのですが、いつ、どこで扉がとまるか。ですから非常に危なかったんです。

したがって、明治用水は、その角へくさびを入れて、扉が転ばないようにしていたんです。我々はよく、ぼんつくもやりますし、川遊びをします。まず川へ行くと、扉の水位をチェックします。というのは、ガキ大将がいて、一番下っ端に、「おまえ、扉のところに行って印をしてこい」と。それから30分ぐらいして、「もう一遍見てこい。それから水が減っているか増えているか」と。増えているという報告が来ると、もう絶対、扉付近には近づかせない。危ない。いつ転ぶかわかりません。減っているという、もう扉は転ばないよという遊びの知恵もありました。

川へ遊びに行くときに、当時は戦後です。食物がありませんでしたので、要するに作物泥棒です。夏の暑いときに行くときにはトマトとか、スイカとか、キナウリ、こういったものを拝借していくんですね。ですけれども、やはりそれもリーダーがいて、「毎日同じ畑からとるじゃないよ」と。今日はここ、明日はここ、明後日はここということで、一遍ぐらいならお百姓さんも目をつむってくれる。

○阿部 それはやはり礼儀なんですよ。

○竹川 ええ。やはり、そういうように多目に見ていただけるんです。毎日とってしまうと叱られますので、ですから順々にとって、一遍ずついただいていくと。それを川につけておいて、川で泳いだ後、それを食べると。また、食べても平気なぐらい水がきれいだった。ですから、その旧頭首工の下では、水眼鏡で見ながら、いかり針で引かけながらアユをとったことがあります。そのぐらい水がきれいだったということです。

○阿部 ありがとうございます。よき時代ですよ。今は、川で子供が遊ばないいろいろなところで話を聞きます。さっきも

川ガキという言葉が出ましたが、そういう子供たちがいなくなつた。それは、今のお話を伺っていると、子供の責任ではないですね。すぐ、「今の子供は」と言うんだけど、全然子供の責任ではなくて、やはり地域の文化というか、大人たちが川を見守る姿、ウリの一つや二つとっていても多目に見るといふ、そういう地域があったからこそなのでしょうね。

今日は、一人、珍しくこちらに座っている女性ですが、この川で遊ぶ子供にとって過酷な時代でありながら、一生懸命、子供に矢作川の川遊びをずっとやり続けている有我さんという方がみえているので、今の子供の話をつなげたいので聞いてみたいと思います。

○有我 有我といいます。よろしくお願いします。私の家は岡崎と豊田市の境目で、天神橋よりもっと下です。そんなところで、今、子供たちを集めて川遊びの会をしているんです。さっき新見さんが言われたように、生き物がいれば子供が集まるんです。川におりられれば子供は本当におりて遊ぶんです。楽しいからだと思います。すごく汚い川なのに、うちのほうの家下川という川にはなぜか、すごく魚種が多いです。何種類でしたか。

○阿部 28種類。

○有我 28種の魚が今でも一杯棲んでいます。それがあから、私が会を催しても、うちの子たちや近所の子たちや、すごくたくさんのお親子が遊びに来てくれます。川における階段ができたんです。その階段ができたおかげで、そういうイベントだけではなくて、親子で遊びに来て、どんどん川に入って、川のよさを楽しんでもらっています。あと、矢作川も天神橋の下になるんですが、さっきから話が出ているように、すごく水量が減ってしまったんです。さっき岩の上を滑ったと言っていました。今、川で泳ごうと思っても、おなかを砂ですってしまうぐらい、本当に水量が下がってしまいました。でも子供たち、やはり川を流れるのは昔と一緒に、何回でも上流にのぼって行って川を流れて、また上流へのぼって行って、また川を流れてという、そういう遊びをたくさんしています。ですから、ぜひ、そういう川を守っていただけるように、私はどこにその話をしたらいいかわからないですが、生き物と川を守っていただいて、どんどん子供が遊べるような環境を残していただきたいと思います。

○阿部 ありがとうございます。もう一人、これも珍しいと思うのですが、女性のアユ釣り師の方がみえています。アユ釣りは矢作川でされているんですか。

○飯田 はい。明日も入ろうと思って上まで見に行つたんですが、明日は無理そうです。

○裕 男の方でもアユ釣りというのはなかなか大変ですが、まだ若い女性の方がアユ釣りにはまった理由ですとか、アユ釣り

のよさ、これからこのようになってほしいということ、ぜひお教えてください。

○飯田 アユ釣りのきっかけは、今、アユ釣りされている方は皆さん一緒だと思うのですが、まず経験させてもらえる環境があったこと。初めてアユ釣りさせてもらったときに、すごく褒めてもらえたんですね。「おまえは天才だ。アユ釣り名人だ」と言われて、調子に乗って、「いっぱい釣れるんだな、おもしろいな」というのと、あと、アユがかかったときから私の大好き物のアユが自分の手元に来るまでに心臓が破裂するぐらいドキドキするんですね。それではまっていきました。

○裕 アユを釣るためにこんなふうになつたらいいというようなことも、もしありましたらお願いします。

○飯田 そうですね。地元の矢作川でたくさんアユが釣れるようにしていただきたいのと、おいしいアユが育つような川にしたいということですね。あと、アユ釣り大会というのもありますので、全国のアユ釣り師が矢作川で一度アユ釣りしたいというような川にしたいと思っています。

○阿部 ありがとうございます。やはり魚がいれば人がだんだん寄ってくる。釣りがしなくなったり、子供が魚をとりたくなったりと、そういうことみたいです。

僕も、一つしゃべっていいですか。僕は下流に住んでいます。さっき話が二つ出た天神橋の下です。僕の子供のころの矢作川の記憶は、僕の家は堤防のすぐ下なので、堤防に立つと家の屋根が見える。こっち側を見ると矢作川が見える。見ると水面のほうが高い。堤防から一気に駆けおると、さっき言ったクワ畑があって、クワ畑の間を駆けおると、そのまま砂浜までずつと行けたんです。だから、たとえ転んでも砂だから痛くない。一気に行けたんですね。ところが、今それをやったら死にます。6m以上、がんと下がっている。砂ってあんなになくなってしまふものなんですね。恐らくダムのおかげで、補充がされない。いまだに減り続けている。この1年でも1m50cm以上は減っていますね。年々50cmづつ下がっていく。どんどん川が細くなっていく。もう川の景色といたら、まったく変わってしまいました。砂の質も全く違う。僕らのときは、こうやって、ふわっとやると風に舞うような砂だった。もう今はガジガジの砂ですね。そんなふうに変化がなくなってしまっているのがちょっと寂しいような、でも、それでもつき合っていきたいなと思っています。

僕、実は用意してきたくだらない質問があるので、一つ受けていただけますか。質問したいのですが、皆さん、手を挙げていただけますか。最初に約束してください。

僕、環境の話とか嫌いで、くだらない話が好きなんだけれども、どうしても皆さんに聞きたい。

どこへ行っても、若いカップルは川に来るんですよ。本当です。東京に行っても、夕暮れになると、どぶ川のほとりでカッ

プルが寄り添っている。若い子たちはそうではないですか。必ず川に行く。海があれば海でしょうが、川に行くとき必ずカップルがいる。皆さん、恋愛中という方はいないですね、もう皆さん、結婚してみえますね、大丈夫ですね。若いころを思い出してください。川でデートしたことがある方、二人で歩いたことがある方、手を挙げてください。（挙手あり）

本当ですか。正直に挙げてください。

それだけなら、それで結構です。

では、川でキスをしたことがある人、手を挙げてください。（挙手あり）

それだけ。本当。ありがとうございます。後ろのほうでもきちんと手を挙げています。偉いね。そういう場所が矢作川にもっとあってもいいなと。ところが、今、矢作川でチューできない。なぜかという、車をとめる場所がない。さっきの話でもあったように、子供たちが遊ぶ場所がないんですよ。チューする場所もない。こんなくだらない川は嫌だな。せめて、こそとキスぐらいできるような、そんな川になってほしいな、なんてね。余計なことを言ってしまいました。ごめんなさい。

そろそろ時間のほうがやってきたんですが、まだ、これを話しておかないと、家に帰って後悔するという人。

それでは、今日のまとめを古川先生からお願いします。

○古川 まとめという話でしたが、まとめることはできません。今、話を聞いていて、後ろで木戸さんとも話をしていたんですが、こういう話をするとお年寄りが元気だなと。私はもう若くないんですが、若い人たちが川の経験というものをここまで持つチャンスを失っていったのかというのがすごく残念です。もし、この70歳前後という方々の経験を皆さんが経験できるとしたら、どのようにしていったらいいのかなというのをぜひ「川会議」の皆さんと、それから水族館も、みんなで一緒にその経験ができるように考えていってほしいというのがきょうの強い感想です。うらやましがせるだけうらやましがらせて、「はい、きょうは終わります。ビールでも飲んでください」というのではなくて……。

○阿部 正直言うと、すごく悔しいです。やらせてあげたいです。やはりそういう世の中にしたいですよ。何でも危ないと奪ってしまっておいて、「遊ばない」と言うのでは、大人としておかしい。

それでは、この辺で「矢作川の今昔物語」の座談会を終わらせていただきたいと思います。つたない司会で済みません。ありがとうございました。

（拍 手）